

通歷

神谷美恵子

遍 歴

神谷 美恵子

著作集

神谷美恵子著作集 9

遍 歴

1980年9月26日 第1刷発行
1987年6月10日 第7刷発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15

電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京0-195132

本文印刷所 精興社

扉・口絵・カバー印刷所 東京美術印刷社

製本所 鈴木製本所

© 1980 Misuzu Shobo

Printed in Japan

ISBN 4-622-00639-1

落丁・乱丁本はお取替いたします



神戸女学院にて 1962年頃

目
次

一 スイスものがたり

序章 スイスへ行く前のこと スイスへ ジュネーヴの家 新渡
戸稻造先生 寺子屋学校 ルソーのこと スイスの山で 国際学
校 デュバイ先生 成績表について 母のこと 終章

5

二 帰国

言葉の問題 「考えること」事始め らいとの出会い 療養の日々
一冊の本 再び治って

61

三 ペンドル・ヒル学寮の話

ペンドル・ヒルへ行くまで ペンドル・ヒル学寮 アナ・ブリントン
とその夫君 マサとの出会い 踏切番のおじいさん 四つの眼
ヴィルヘルム・ゾルマンとナチ ゾルマン氏との別れ キャロライ
ン・グレイヴスン 神秘体験をめぐって キャロラインとの別れと再
会 ガールズ・クラブの人びと ドラ・ウィルスン 日本人の二人
ぐらし ペンドル・ヒルの春 医学志向への復帰 バリ行き ペ
ンドル・ヒル以後

95

四 現実の荒波の中で

東大入局と終戦と文部省経験と 愛生園見学の記 文部省日記 新
しい生活 関西へ 愛真聖書学園 子どもの病氣 フランス語塾
経営 名無しの会 カナディアン・アカデミー 女子大とらい園に
て

「あながき」にかえて

神谷宜郎

目次

一 スイスものがたり

序章 スイスへ行く前のこと スイスへ ジュネーヴの家 新渡
戸稻造先生 寺子屋学校 ルソーのこと スイスの山で 国際学
校 デュバイ先生 成績表について 母のこと 終章

二 帰国

言葉の問題 「考えること」事始め らいとの出会い 療養の日々
一冊の本 再び治って

三 ペンドル・ヒル学寮の話

ペンドル・ヒルへ行くまで ペンドル・ヒル学寮 アナ・ブリントン
とその夫君 マサとの出会い 踏切番のおじいさん 四つの眼
ヴィルヘルム・ゾルマンとナチ ゾルマン氏との別れ キャロライ
ン・グレイヴスン 神秘体験をめぐって キャロラインとの別れと再
会 ガールズ・クラブの人びと ドラ・ウィルスン 日本人の二人
ぐらし ペンドル・ヒルの春 医学志向への復帰 バリ行き ペ
ンドル・ヒル以後

四 現実の荒波の中で

東大入局と終戦と文部省経験と 愛生園見学の記 文部省日記 新
しい生活 関西へ 愛真聖書学園 子どもの病氣 フランス語塾
経営 名無しの会 カナディアン・アカデミー 女子大とらい園に
て

「あながき」にかえて

神谷宜郎

一 スイスものがたり

序章

人の一生にはさまざまな時期、さまざまな起伏がある。個人によってその起伏は大いに異なる曲線を描くから一般論を語るときは、どうしても平均的なところを現わすことになるが、ここで私は思い切って自身の幼年期の一時期を切りぬいて、それが後の生涯に対して持ったと思われる影響を考えたい。

これを題して「スイスものがたり」というのは奇妙なことではある。私はただ家庭の事情から、日本の小学校四年一学期をすませたところで、スイスのジュネーヴで暮らしただけのことだ。九歳から十二歳までのたった三年余りのことである。そこで二つの学校に通いはしたものの、それらの学校で教わっていたどにかスイスについて特別に知っているわけではない。スイスに関係の深いルソー、ペスタロッチ、ピアジェ、ヒルティなどについては、ずっと後になって興味を抱き、多少はその書きものを読みはしたものの、ここで語る時期には、彼らの名前さえ知らなかった。例外はルソーであるが、

それとてどんなに幼稚なかたちでの出会いであったかは、本書でやがて述べよう。同時にそんなにかりそめな出会いであったにしても、彼の思想の影響を知らぬ間に、深く受けていたことをも語ろう。

また第一次世界大戦のあとのことであつたから、もう二度とこういう大戦があつてはならない、という多くの人びとの願いをこめて国際連盟が設立された時期にあたつていた。そのため、そこに集まる世界各国の政府代表たちの家族のために「国際学校」というのがつくられ、そこに一年余通つて、いろいろな国の子どもたちとともに学んだ経験が、のちのちまで影響を及ぼしていることをも語ろう。

単なる個人的な思い出話というよりは、もう少し深くものを考えてみる機会になれば、と願う。年が若ければ若い頃ほど、わずかの時間帯でも、その内容の重みは大きく、精神に残す跡は深いのであるから。

五十年余も前の経験であつてみれば、記憶ははなはだおぼろではある。さいわい、当時の記録——日記、成績物等——が少し残っているので、それらを手がかりに述べてみたい。

スイスへ行く前のこと

これから述べるようにスイスで私は急に明るくなり、成長したように思うのだが、なぜそうであつたかを考えるのには、行く前のことを少し述べておくべきであろう。

私は——人によってはそう思われるように——決して外国生れではなく、またとくべつに恵まれた

富裕階級に属するものではない。

いうまでもなく「富」と「恵まれてゐる」ことは必ずしも結びついていない。「恵まれてゐる」ということの意味は人によっていろいろちがった色あいがつけられようが、ここでは両親そろった家庭に生れ、しかもその家庭が平和で明るいものである、というのが子どもにとって最も恵まれてゐるこの根本的要素であると考えたい。そうすると私はたしかに両親そろって、新しい理想を求める家に生れた点で恵まれていた。ただ、両親ともに個性がつよく、必ずしも和気あいあいとした家庭ではなかった。これには恐らく、父の両親や妹などをも父が扶養しなければならなかったのに、彼らと父たち的人生観があまりにも異なっていたところにも一因がある。何一つくわしいことは知らない。ただ、結婚当初の父たちを知る方の証言によれば、敏感な私の心をハラハラさせるような事態がたびたび家に起つたらしいことはうたがえない。母は物心ともに苦勞の連続で、私に七時間も八時間も授乳できなかったことがある、とこれは母自身からきいた。そのためばかりでもなからうが、私は早くから泣虫でうじうじした子どもであつたらしい。

* 川西田鶴子…前田様のよき御半身房子夫人『前田多門その文、その人』刊行世話人代表堀切善次郎 連絡先…東京都千代田区日比谷公園東京市政調査会 二三八―二四二頁、昭和三十八年

幼い頃の思ひ出が主として暗いものだったといつか何かに書いたら、三歳ちかく年長の兄はびっくりしたという。同じころ同じ家庭で長男として生れた彼にとって、幼児期はすべて明るさそのものだったというのだから、ここには大きな性格の差、うけとめかた（体験）の差があるのだろう。子ども

の心は主観で埋めつくされているから、幼いころの思い出話ほど客観性を欠くものはない。しかし、その主観こそその時の子どもにとっての体験的事実なのである。これはぜひ認めておきたい。

私の最も幼い頃の思い出に母はいない。何かの仕事で両親とも渡米し、その間、兄は父方の親類のところに住み、四歳の私と二歳の妹は母方の祖母と、まだ独身であった叔父の住む横浜の家にあずけられた。この叔父は当時大学を出て間もない役人だったと思う。その後間もなく職を辞して無教会主義のキリスト教の独立伝道者となったから、恐らくこの頃は悶々として自分の道をさぐり求めているのではないかと考えられる。

それだけに彼は理想主義的できびしく、私は当時、叔父に叱られたおぼえしかない。ある時など、よほど私がわるさをしたとみえ、松の木の幹に荒なわでしばりつけられ、「あやまれ」と何度もどなられた。何をあやまらなければならないのか、それもわからずに私はただ泣き叫びつづけた。

もう一つの暗い思い出は、そこで小さな妹が死にそうな病氣にかかったことだ。毎日、人力車に乗って医師が往診に来る。妹以外に遊び相手もなかった私は、家の前で人力車の黒いほろを言い知れぬ不吉な思いで見つめながら、ひとりで石けりなどしていた。妹は死ぬのだろうか。死とはどういうことか、と考えて胸がしめつけられた。

この生活の中での救いは明るくて元気な祖母の存在であった。おひるの食事のおかずには必ずいり玉子を、私自身につくらせてくれる。大きな火鉢と小さな鍋。祖母が卵を割ってくれると私は一心にかきまわす。自分で何かをこしらえる楽しさを最初に教えてくれたのはこの祖母だ。

妹もどうにか助かり、両親も帰ってきて、私たちは東京の下落合の小さな家に移った。一家にとっ

ては長い流浪のあとで、やっと東京に落ちつけたわけだ。父は内務省の役人として群馬県をふり出しに、岡山市に約一年、長崎県に半年余り、果ては南洋のパラオまで辞令一本で転々としていた。私が岡山生れと言っても、生れてからたった三、四ヵ月いただけのことだ。

父の生家が没落していたため、初期のわが家は仕送りもせねばならず、ひどく貧しかったと母によく聞かされたが、もちろん赤ん坊はただひもじくて泣くだけのことだった。

他のきょうだいたちは次々と成城学園に就学したが、どういうわけか私だけ下落合小学校に上がった。当時はまだ田舎という感じのところで、万事がのんびりしていた。私のような神経質な子どもにはピッタリの学校だったのだろう。ろくに勉強しなくてもやさしい先生がかわいがって下さったし、隣には親切な上級生が住んでいて毎朝さそいに来てくれた。大きな麦わら帽子をかぶり、長い草履袋をぶらさげ、友だちと並んで泥んこの道を長ぐつで歩いている写真が一枚残っている。この下ぶくれの小さな女の子の顔を見ると、土から生え出たばかりの雑草のような、単純な「生きるよろこび」がそこから発散しているようだ。この泥んこの田舎道こそ、私に最もよく適合していたエレメントだったにちがいない。

しかし、この原始的なよろこびの日々は一年しかつづかず、二年生になると東京市でも名門のS学院に編入させられてしまった。なぜかは全く知らない。S学院は英国の尼さんたちが経営している学校で、小学校一年から英国人の先生がみっちり英語を教え込む。それが母にとって魅力だったのかも知れない。母自身、貧しい地方の娘として上京し、クエーカー教徒の経営する女学校で給費生として